



共同研究集会  
「公的統計マイクロデータ利活用に関する研究集会」  
2023/11/17

# 余暇のマルチタスク に関する基礎的分析

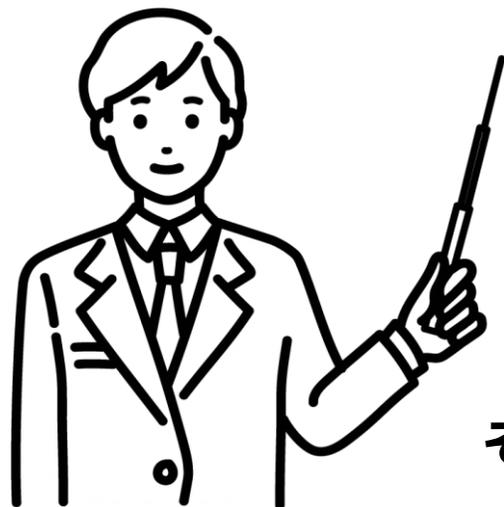
平井 太規

愛知大学地域政策学部

tahir@vega.aichi-u.ac.jp

# 本報告の概要

## 余暇時間におけるマルチタスク動向の基礎分析



主行動が余暇である時間



そのうち、同時行動を伴っていてマルチタスクとなっている余暇時間はどのくらいあるのか？

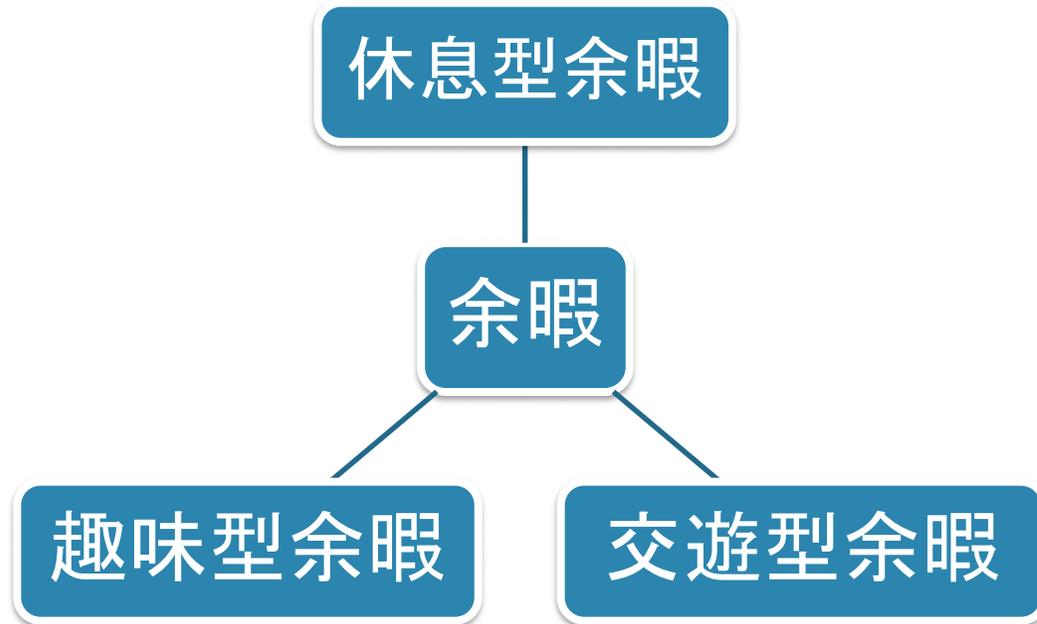
本研究では、余暇時間の中で同時行動に家事および育児が伴っている時間を【マルチタスク余暇時間】と位置づけ、男女別（夫妻別）に集計する。

# 研究の背景 (1)

## 余暇時間 Leisure Time, Free Time

⇒24時間の中で個人が自由に使えると想定される時間 (石田 2019)

⇒第3次活動時間



Aguiar and Hurst (2007) や石田 (2019) を参考にすると、余暇は主に上記3つのパターンに分類できる。本研究では、休息型余暇を扱う。

## 研究の背景 (2)

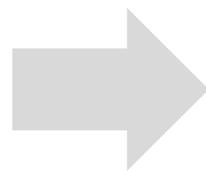


余暇をはじめ時間的なゆとりを持つことは、  
社会生活上、極めて重要

余暇時間が少なくなったり、余暇そのものの質が低下すれば、「時間貧困」(Vickery 1977、石井・浦川 2014、水野谷 2020) に陥る可能性がある



既存研究



余暇時間の  
量的構造に着目

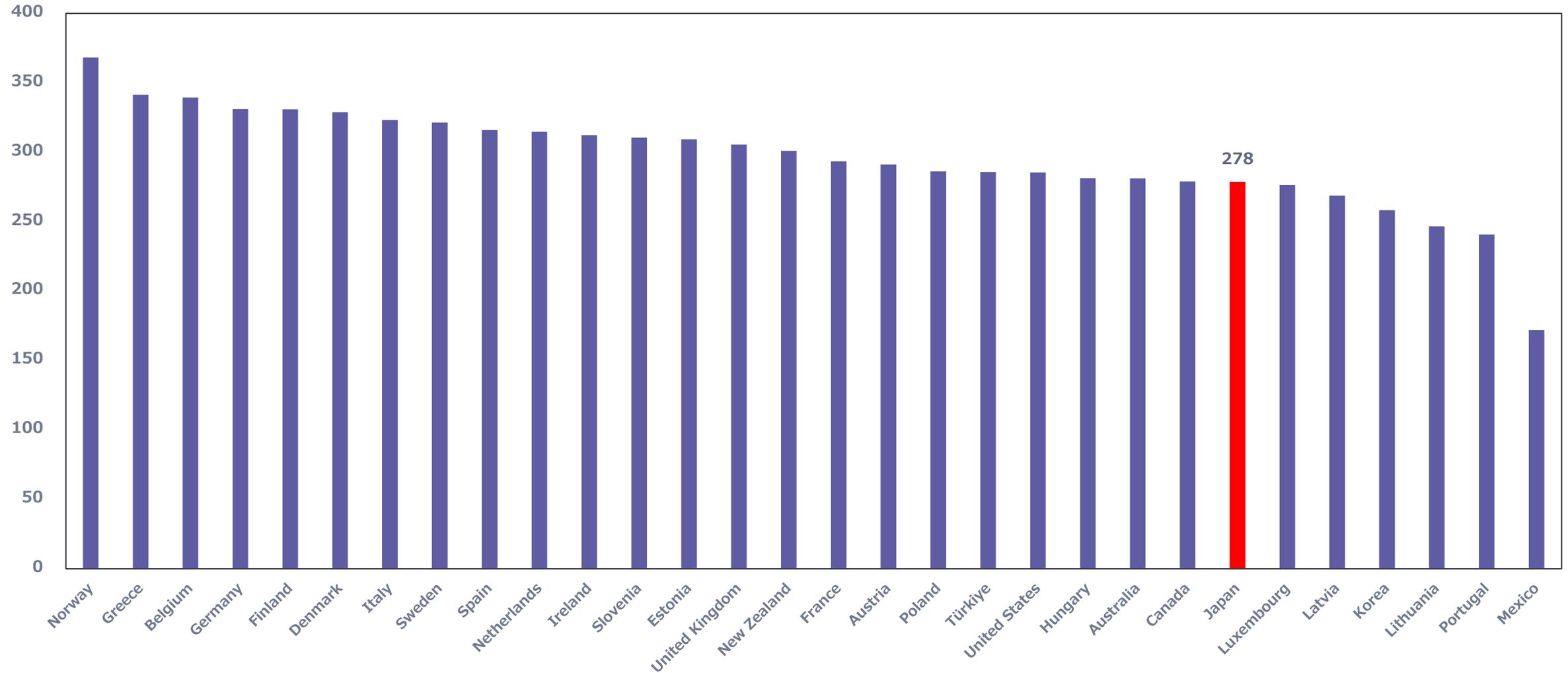


本研究



余暇時間の  
質的構造に着目

# 余暇時間の量的構造に関する既存研究（1）



資料 : OECD, "Time Use", Socia Protection and Well-being (<https://stats.oecd.org/Index.aspx?datasetcode=HSL>)

注) 対象者は15-64歳の男女、余暇はTime spent socialising; attending cultural, entertainment and sports events; in hobbies, games and other pastime activities; participating in sports and outdoor activities; using mass media; performing other leisure activitiesと定義されている。

# 余暇時間の量的構造に関する既存研究（2）

ジェンダー	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 男性の方が余暇時間が長く、女性は短い（Bittman and Wajcman 2000 ; Mattingly and Bianchi 2003）</li></ul>
労働時間	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 自身の労働時間が長くなるほど余暇時間が短い（水落 2010）</li></ul>
学歴	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 高学歴ほど余暇時間が短い（Robinson and Godbey 1999）</li><li>・ 学歴は余暇時間に影響しない（Jarozz 2016）</li></ul>
職業・職種	<ul style="list-style-type: none"><li>・ ホワイトカラーよりもブルーカラーの方が短い（Jarosz 2016）</li><li>・ 職業や職種による違いはない（Katz-Gerro and Sullivan 2010）</li><li>・ ホワイトカラーは趣味や交遊が長く、ブルーカラーは休息が長い（佐藤・石田 2016）</li></ul>
子どもの有無	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 子どもがいることで余暇時間は短くなる、特に女性においてその傾向は顕著（Mattingly and Bianchi 2003）</li></ul>

# 余暇時間の量的構造に関する既存研究の成果と課題

余暇時間の長さや、余暇時間の規定要因については多くの蓄積があり、余暇時間の量的行動に関する研究は多い一方で、質的構造を扱った研究はまだ多くない

例えば、余暇時間であっても子どもと一緒にいれば余暇本来のリラックス効果が薄れる (Bittman and Wajcman 2000、Mattingly and Bianchi 2003)。これは余暇のマルチタスク構造によるもの。このような点にもっと着目するべきでは？



近年、経済学を中心にマルチタスクという観点から生活時間の質的構造を捉えようとする研究が活発化しつつある (Kalenkoshi and Foster 2015)

# 生活時間上のマルチタスクに関する既存研究

マルチタスクによって、時間的効率性が図られることもあるが、時間的抑圧となつて、心的ストレスを受けやすい (Offer and Schneider 2011)



- ①とりわけ**女性は男性よりもマルチタスクによる時間的抑圧を受ける**傾向にある (Sullivan and Gershuny 2013)
- ②**その中でも家事や育児を実践する際にマルチタスクとなっている** (Offer and Schneider 2011、Sullivan and Gershuny 2018)

余暇という休息の時間帯であっても、女性は家事や育児などによって、本来の時間的ゆとりを確保するのが難しい状況にある可能性

# 使用データ

## 「社会生活基本調査」匿名データ：2016年

\* 2001年調査よりA票・B票、2種類の調査票が導入されている。本研究ではB票のデータを使用。

調査目的	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 国民の生活時間の配分および自由時間における活動を調査する</li><li>・ 国民の社会生活の実態を明らかにする</li></ul>
調査時期	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 10月上旬～中旬のある期間のうち連続する2日間</li></ul>
調査対象	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 指定された調査区内に居住する世帯から選定された、約4000世帯内にふだん住んでいる10歳以上の男女</li></ul>
抽出方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 1次抽出：都道府県ごとに人口に基づく確率比例抽出により抽出</li><li>・ 2次抽出：等確率無作為抽出により、各調査区から10世帯前後を抽出</li></ul>

\* 政府統計匿名データは「行政機関等が行う統計調査によって集められた調査票情報を、特定の個人又は法人その他の団体の識別（他の情報との照合による識別を含む）ができないように加工したもの」(<https://www.nstac.go.jp/services/anonymity.html>) である

# 分析対象・余暇の定義



## 12歳未満の子を持つ子育て世帯の夫妻

- ⇒核家族
- ⇒夫有業・妻有業もしくはは無業
- ⇒土日のサンプルに限定
- ⇒土日に仕事しているサンプルは除外
- ⇒主行動の余暇時間が1分以上

余暇

休息型  
余暇

- ・読書
- ・新聞、雑誌
- ・テレビ
- ・ビデオ、DVD
- ・ラジオ
- ・CD、ファイル
- ・休養、くつろぎ

# 家事・育児の定義

本研究では、マルチタスク動向を測る指標として、主行動が余暇時間の中で同時行動が家事・育児となっているケースを扱う。家事・育児は以下の行動を示す。

## 家事

- ・ 食事の管理
- ・ 菓子作り
- ・ 園芸
- ・ 住まいの手入れ／整理
- ・ 衣類等の手入れ
- ・ 衣類等の作製
- ・ 建築／修繕
- ・ 乗り物の手入れ
- ・ 世帯管理
- ・ 子供の介護／看護
- ・ 家族（子供以外）の看護／介護
- ・ 子供（乳幼児以外）の身の回りの世話
- ・ 家族（子供以外）の身の回りの世話
- ・ その他の家事

## 育児

- ・ 乳幼児の介護／看護
- ・ 乳幼児の身体の手世と監督
- ・ 乳幼児と遊ぶ
- ・ 子供の付き添い等
- ・ 子供（乳幼児以外）の教育
- ・ 子供の送迎移動
- ・ 子供（乳幼児以外）と遊ぶ

# 分析の実際

- ①余暇時間として、**主行動が休息型余暇になっている合計時間**を  
夫妻別に算出
- ②その中で、家事および育児が同時行動として実践されている時間を  
**【マルチタスク余暇時間】**として算出
- ③余暇時間のうちマルチタスク余暇時間が占める割合  
**【マルチタスク余暇割合】**を算出
- ④マルチタスク余暇時間の長さが余暇時間全体に占める割合の  
規定要因は何か？を多変量解析により明らかにする

# 分析結果（1） 夫の余暇時間におけるマルチタスク動向

<b>N=405</b>	<b>Avg</b>	<b>S.D.</b>	<b>MIN</b>	<b>MAX</b>
<b>余暇時間 (主行動)</b>	<b>179.93</b>	<b>152.13</b>	<b>15</b>	<b>840</b>
<b>マルチタスク 余暇時間時間</b>	<b>4.07</b>	<b>22.59</b>	<b>0</b>	<b>255</b>
<b>マルチタスク 余暇割合</b>	<b>2.12%</b>	<b>10.75</b>	<b>0%</b>	<b>100%</b>

## 分析結果（2） 妻の余暇時間におけるマルチタスク動向

<b>N=373</b>	<b>Avg</b>	<b>S.D.</b>	<b>MIN</b>	<b>MAX</b>
<b>余暇時間 (主行動)</b>	<b>148.43</b>	<b>109.85</b>	<b>15</b>	<b>675</b>
<b>マルチタスク 余暇時間時間</b>	<b>4.75</b>	<b>22.17</b>	<b>0</b>	<b>270</b>
<b>マルチタスク 余暇割合</b>	<b>3.64%</b>	<b>14.97</b>	<b>0%</b>	<b>100%</b>

## 結論と課題

- (1) 分析結果より妻は夫よりも余暇時間が短い。それにもかかわらず、マルチタスク余暇時間は妻の方が若干長い。
- (2) それ故に、妻のマルチタスク余暇割合は夫よりも平均で1ポイント以上高い。
- (3) 今回の分析ではマルチタスクを「主行動が余暇のうち、同時行動が家事・育児」のケースに限定しているが、ただでさえ妻の余暇時間は夫よりも短いのに、家事や育児等で妻の余暇の質が低くなるリスクがあることが示唆される。
- (4) 分析結果は単純集計にとどめている。多変量解析によって、マルチタスク余暇割合の規定要因を今後明らかにし、今月末のIATUR（国際生活時間学会）にて報告する予定である。

# 参考文献

- Aguilar, M. and Hurst, E., 2007, Measuring Trends in Leisure: The Allocation of Time Over Five Decades, *The Quarterly Journal of Economics*, 122(3): 969–1006.
- Bittman, M. and Wajcman, J. 2000, The Rush Hour: The Character of Leisure Time and Gender Equity, *Social Forces*, 79(1):165–189.
- 石田賢示、2019、「余暇時間の構造とその階層差 –平成23年社会生活基本調査を用いた実証分析–」『社会科学研究』70(1): 73-95.
- 石田賢示・佐藤香、2016、「生活時間からみた「ゆとり」の社会階層間格差」『統計 2016年8月号』: 14-19.
- 石井加代子・浦川邦夫 2014 「生活時間を考慮した貧困分析」『三田商学研究』57(4): 97-121.
- Jarosz, E., 2016, The Duration and Dynamics of Leisure among the Working Population in Poland: A Time Use Approach, *World Leisure Journal*, 58(1): 44-59.
- Kalenkoshi, M, C. and Foster, G.(eds), 2015, *The Economics of Multitasking*, Palgrave Macmillan.
- Katz-Gerro, T. and Sullivan, O., 2010, Voracious Cultural Consumption: The Intertwining of Gender and Social Status, *Time & Society*, 19: 193-219.
- Mattingly, M, J. and Bianchi, S., 2003, Gender Differences in the Quantity and Quality of Free Time: The US Experience, *Social Forces*, 81(3): 999–1030.
- 水野谷武志、2020、「乳幼児を持つ夫妻及び母子世帯の時間貧困」『統計学』119: 18-32.
- 水落正明、2010、「夫婦の家事・余暇時間に関する分析：「社会生活基本調査」個票を用いて」『三重大学法経論叢』28(1): 1-14.
- Offer, S. and Schneider, B., 2011, Revisiting the gender gap in time-use patterns: multitasking and well-being among mothers and fathers in dual-earner families, *American Sociological Review*, 76: 809–833.
- Robinson, J. and Godbey, G., 1999, *Time for Life: The Surprising Ways Americans Use Their Time*, Pennsylvania State University Press.
- Sullivan, O. and Gershuny, J., 2013, Domestic outsourcing and multitasking: How much do they really contribute?, *Social Science Research*, 42: 1311–1324.
- Sullivan, O. and Gershuny, J., 2018. Speed-up Society? Evidence from the UK 2000 and 2015 Time Use Diary Surveys, *Sociology*, 52(1):20–38.
- Vickery, C., 1997, The time poor: A new look at poverty, *The Journal of Human Resources*, 12(1): 27-48.

# 謝辞

**（１）ご清聴ありがとうございました。本日の研究報告は、JSPS科学研究費助成事業基盤研究（C）（22K01913）の一部です。**

**（２）データの使用については、一橋大学経済研究所へ申請し、独立行政法人統計センターの了承を得ました。本研究報告で示したデータは、統計法に基づいて、独立行政法人統計センターから「社会生活基本調査」（2016年）に関する匿名データの提供を受け、独自に作成・加工した統計です。**

**（３）本研究集会の運営・準備等をいただきました先生方・スタッフの皆様にご心より御礼申し上げます。**